

抄経産

先輩記者の千野境子さんから新著が送られてきた。マニラやニューヨークの特派員、論説委員長などを歴任した千野さんには、国際問題についての著書が多い。今回選んだテーマは、なんと北斎である。▼北斎といえは、海外でもっとも名前が知られた日本人といっている。中国外務省の報道官が、原発の処理水の海洋放出を揶揄する画像に北斎の代表作のパロディ画を選んだのも、知名度の高さを悪用したわけだ。▼『江戸のジャーナリスト 葛飾北斎』（国土社）によれば、本人も海外情勢に

並々ならぬ好奇心を示していた。当時幕府は、長崎のオランダ商館に4年に1度の江戸参府を義務付けていた。商館から絵の注文を受けた北斎が、商館長らからヨーロッパ情勢などを聞いていた可能性が高い。▼オランダ人の宿舎を描いた作品もある。野次馬の江戸っ子が覗き込み、それを商館長が見下ろす構図だ。両方に注がれる北斎の眼差しに「ジャーナリスト魂」を感じる、と千野さんはいう。▼書店をぶらついていたら、北斎のライバル歌川広重をテーマにした新刊本『広重の浮世絵と地形で読み解く 江戸の秘密』（集英

社）が目にとまった。著者の竹村公太郎さんは元建設省幹部で土木の専門家、こちらも広重とは意外な組み合わせである。▼広重の浮世絵は情報の宝庫だと竹村さんはいう。たとえば「東海道五拾三次」の「鞠子名物茶店」なら、背景の禿山に目をつける。江戸時代の末期には、森林はほとんど伐採されていた。そこに現れた黒船が石炭の存在を教える。先の大戦の原因となった石油から原発事故まで筆を進め、エネルギーで苦闘してきた日本の歴史をたどる。今年の連休の巣ごもり生活で、浮世絵の発信力の大きさを再認識した。

2021. 5. 5

2021. 5. 5